

戦争体験談

大竹 ハルエ（大正 13 年生まれ）

「欲しがりません、勝つまでは」これは私が学生時代の合言葉でした。学生といっても出征兵士のお見送りと、入隊されている家のお手伝い(勤労奉仕)で、勉強どころではなかったのです。

卒業後は軍事工場でもあった、柿崎理研工場の電話交換手として勤めていました。長岡の空襲の時は女子二人で夜勤をしており、アメリカの爆撃機は夜空を煌々とライトを照らし、金属性の轟音を立てて会社の上空を通過していました。工場長さんが来られて、「もう、頑張っても無駄です。すぐ私の防空壕に入りなさい。」とおっしゃって、身の縮む思いをしたことが忘れられません。

「竹竿の先に荒縄を巻きつけ、焼夷弾が落ちてきたら払い消す。敵が来たら、尖った竹槍で突き刺す。」そんなことなど出来やしなかったのに、当時は本気で訓練を受けていたのです。

同じく金属性の轟音を立てて、直江津の町に爆弾を投下した時、丁度私は会社が休みで、友達と顕法寺(城山)の山へ山菜とりにでかけていました。山頂に居たとき、見たことも聞いたことも無い大きな飛行機が悠然と尾神岳のほうに飛んで行き、すぐに引き返して来たのです。まもなく、山々が揺れて木々が波立ち、「ドカーン、ゴーゴーゴー」何事が起こっているのかも判らないまま、恐ろしさで山中の地面に伏しておりました。震える足で山を降り始めたのは、しばらくしてからです。途中で出会った、田打ちをしているおばさんに声をかけても、「何だね、あの音は」と、鋤を杖にして震えておられたのを覚えています。

夕方にならないと電気も点かないのでラジオも聞けず、後で詳細を聞いたときは「もう、駄目だ」と思いました。

あれからもう 60 余年。昨年 12 月には、安江にアメリカ軍の投下した不発弾が処理されたとも聞きました。

あの時、山で受けた衝撃は未だ忘れることは出来ません。私は寄宿舎生活でしたが、土曜日は午後五時まで働いて、それから 2 時間も歩いて吉川にある家まで帰ります。バスなどありません。月曜日は早朝 5 時 10 分に家を出て、七時半前には門に入っていなければならなかったのです。

そんな生活で足腰が鍛えられたせいでしょうか、4 月には 83 歳になりますが、お陰さまで元気に過ごしております。園芸が趣味ですので、きれいなお花に囲まれて日々を送られることの幸せを感じております。